熊熊通信

ペストの仮面

札幌市医師会手稲区支部広報部長
むらさき内科循環器クリニック　院長
村　崎　俊　之

書斎を掃除していたら、埃をかぶった奇妙なお面が出てきた。ゴミ箱に捨てようと思ったがふと手が止まった。これは10年以上前にイタリアの小さな雑貨屋で見つけたものだ。カラスの嘴に丸眼鏡をかけた白いお面。気味悪いものだったがなぜか気になった。妻の反対を押し切り購入し、日本に持ち帰った。

後に調べて分かったことだが、これはペストの仮面というものらしい。16世紀のベネチアでペストが蔓延した際、当時の医師達が使用したものだ。カラス状の嘴に薬草やアルコールを湿らせた綿を詰め込み、患者を診察した。長い嘴は患者との距離をとるための働きもある。それに丸眼鏡をかけ黒いマントを着て手にはステッキを持ち、患者の布団や衣服をそれでひっかけて診察したのだという。この衣装はフランスの医師シャルルドルムによって考案されもので、このようなペスト医師がこの時代活躍したのだそうだ。感染防止のための必死の様相だが、これで感染の予防ができると本気で信じていたのは、今考えるとこっけいな話だ。

しかし最近もこれに似た「ペスト医師」を目撃したような気がする。一昨年の新型インフルエンザ騒ぎの時だ。国を挙げて新型インフルエンザを国内に入れるなという水際作戦。マスクと帽子に青い防疫服を身にまとって、空港で動き回る姿はまるで中世の「ペスト医師」だった。

潜伏期間や不顕性感染を考えれば、この水際作戦がばかげたことだと分かりそうなものだが。そもそも水際対策に明らかな感染遅延効果はないとのevidenceもある。不勉強とパニックが「ペスト医師」を作り出す。evidenceがあるにもかかわらずそのような行動にいたるのは、むしろ当時のペスト医師よりこっけいだったかもしれない。

EBMの時代に医師となり、多くの医療行為が「ペストの仮面」になっていったのを経験した。私たちの経験や論理で正しいと考えてきた医療をEBMが検証し続けている。その検証によって、経験や論理が「ペストの仮面」になってしまうこともある。それは医学の進歩として喜ぶべきことだろう。

それだけに油断すると、いつでも自分が「ペスト医師」になる。今の自分の医療に自己反省がなく過信すると、知らぬ間に「ペスト医師」になってしまう。そうならないように日々勉強し、研鑽する必要があるのだとあらためて考えてしまった。

結局奇妙な仮面は捨てることができずにいる。今では書斎に鎮座し、しっかり勉強しろよと私を見守り続けている。

小樽　札幌　函館

札幌市医師会南区支部広報部長
札幌逓信病院内科主任医長
河原崎　　暢

今回、北海道医報に載せていただくこととなり、北海道に関して思いついたままのことを書かせていただきます。

函館出身の昭和に活躍された作家亀井勝一郎は、以前、当時の北海道の主要都市を文学的に、札幌のピューリタリズム、小樽のリアリズム、函館のロマンチシズムに分けて言ったそうである。明治の開拓時代の都市の特徴をそれぞれ言い表しているといっていいだろう。戦後からの札幌市の一極集中化に伴い、北海道の政治・経済・文化・教育のすべてが札幌に集中し、小樽、函館が以前の隆盛をほとんど失ってしまい、ただの観光都市として存続している平成の現在においては、むろん消滅してしまったきらいがある。しかし、やはりそれぞれの都市の精神的基盤として今でも残存していると考えられる。

昭和初期、函館・小樽・札幌の人口が約15万くらいで横並びの時、各都市がまだ個別の魅力ある特徴を持っていた頃の時代を回想してみようと思う。大正末期～昭和初期の時代は、第一次世界大戦が終了し、戦場とならなかった日本が明治維新後最大の好景気を迎えた時代である。日本の資本主義が軽工業から重工業へ移行し、欧米の技術・文化・思想などを積極的に受け入れ、都市部に賃金労働者＝サラリーマンが形成され、大正デモクラシー、昭和モダンニズムと呼ばれる日本の民主主義が高揚を示した時代である。戦前は一般的に暗いイメージがあるが、北海道の農産物も、戦争で荒廃し食糧不足となったヨーロッパに高く取り引きされ未曾有の好景気に沸き、現在の北海道農業の基礎が出来上がった時代でもあった。

まず、小樽は当時、空知の炭鉱の幌内と鉄道で結ばれ、石炭の積み出し港として、そして海外貿易の中継地として北海道の雑穀の輸出を行い、名実とも

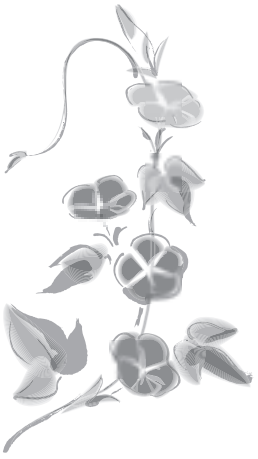
に北海道経済の中心地であった。三井物産、三菱商事等の商社の支店や北のウォール街と称される大きな銀行の本支店街も小樽にあった。小樽の相場はロンドンまで直結すると小樽商人は豪語した。実際、高橋直吉という小豆将軍と呼ばれロンドンまで名が知られた相場師がいた。雑穀王、海運王など多くの豪商を生んだ。今も、彼らの住んだ豪邸跡を見学することができる。小樽の経済活動の場所は三方が山に囲まれた狭い所で、北海道で最も階層分化が進んだ場所である。すなわち、資本家、中流階級、労働者が狭い所で凝縮されていた。丘の高い所に豪邸が散在し、川沿いの低地は労働者の長屋がびっしりとあった都市だった。

労働争議も盛んで、プロレタリア作家の小林多喜二が活躍できる土壌はあった。街も札幌みたく計画的に作り上げたのではなく、経済活動に任せて雑然と形成され、これが小樽のリアリズムと言われるゆえんだと思う。石川啄木も小樽のことを、「悲しきは小樽の町よ　歌うこと無き人々の声の荒さよ」と歌っている。人々の中には荒んだのもいたのだろう。啄木にとってあまり良い印象は無かったようだ。今の小樽は人口減少に歯止めがかからず、道内の10万人以上の都市で唯一過疎指定を受けてしまい、変に落ち着いた街になってしまったが、当時は狭い土地で人々は、盛んに経済活動をして金持ちになるチャンス（小樽ドリーム）をうかがっていて、非常に雑然とした都市だったのだろう。水の江瀧子や岡田嘉子など女優を生んだ土地でもある。

札幌はどうだろうか。当時の札幌は帝国大学があり教育の盛んな所でもあったが、純粋に北海道の政治の中心地で役人の街であった。今でいうオーストラリアのキャンベラ市やブラジルのブラジリア市みたいな都市と考えられる。石狩平野の真ん中に街は初めから計画的に作られ、土地は広く無限に近かった。まず都市計画の基線となる大通公園が作られ、その北を官吏の区域、南を民間の区域と整然と分けられた。官吏が民間人より何となしに偉いという札幌人気質は開拓使時代からあった。

商人も道庁の御用商人みたいな印象だと思う。だから、小樽のような相場で儲け何々王とかいわれる商人はあまりいない。極端な金持ちも少なかったが、極端な貧しい人も少なく、中流階級の街だった。土地が広いので階層別に住み分けされることもなかった。大学もあり教養人も多かった。札幌農学校（旧北海道帝国大学の前身）の初代学長クラークからキリスト教的道徳教育の薫陶を受けた一期生はほぼ全員キリスト教に入信し、二期生からは新渡戸稲造や内村鑑三などを輩出し、横浜、熊本に並んで日本のプロテスタントの発祥の地となった。札幌のピューリタリズムと言われるゆえんである。

石川啄木も札幌を気に入り、「まことに美しき北の都なり　しめやかなる恋の多くありそうな郷なり　詩人の住むべき都会なり」と言っている。昔の札幌には清さに溢れていたのだろうか。しかし、開拓使は現地の男性を留まらすために薄野に官営の遊郭を作ったり、農学校の一部の学生をがっかりさせていたのも事実であるらしい。今の札幌は北海道の良いところや悪いところもすべて集めてしまい、時計台とか北一条東一丁目の札幌教会などに昔の面影をやっと留めているに過ぎない。

函館はどうであろうか。函館は江戸時代に開港され、北海道で一番コスモポリタン的な雰囲気がある。私は函館協会病院に勤務していて、２年間函館に住んでいた。たくさんの文学者を輩出し、岩手で挫折をして他県で新生活を始めようとした啄木を引き抜いたのも函館の教養人だった。残念ながら函館のロマンチシズムが分かるほど函館の知識は無い。誰かに教えてもらいたい。

大正から昭和の初め、北海道が右肩上がりの時、かつての小樽、札幌、函館はそれぞれの個性的な特徴と歴史と誇りを持ち輝いていた。現在、仙台や名古屋など他の政令指定都市と競い合うために、また経済効率のため札幌一極集中化で札幌のみ大都会になっていることに反対はしない。しかし、北海道の都市が札幌以外は何も特徴とするところがなくただ寂れていて、良くて観光都市というのは、結局は札幌を含めた北海道全体の衰退につながると考えるのは私だけであろうか。